

ボヘミアーン



羊蹄医師会
J A北海道厚生連 倶知安厚生病院

早川和彦

11年間札幌の民間病院で産婦人科医をしてきましたが、今回縁あり、4月から倶知安厚生病院で働いております。他のDr.や病院職員、地域の方々にも支えられて、大変恵まれた職場環境です。単身で来ているせいか、お手伝いに来てくれる若手の先生方といろいろ話ができるのが、今一番の楽しみでしょうか。

Dr.が次々と定住してしまう倶知安、ニセコ地区は、多彩な業界から注目されている田舎です。今もリッツ・カールトンやらハイアットやら高級コンドミニアムに高級別荘もどンドン建設中。全てが喜ばしいとは言えない話ではありますが、お金と人（外国人）がさらに入り込んできそうです。病院も、言葉と文化の違いで更に面倒くさく忙しくなるでしょう。

話は変わりますが、夕飯を食べに安い居酒屋のカウンターにいと、都会とは違う変わった人たちが来ます。日焼けした20代半ばから30代の若者らがちょくちょく訪れます。日を重ねて徐々に判明したのは、彼らはあまり仕事をしていない。夏はサーフィンと釣り、冬はボード。あちこちでイベントがあれば、自分で制作した作品を売ったり、たこ焼き屋をしたり、たまに農家を手伝ったり。家は複数でシェアして、食事は1日1回かせいぜい2回。お金が少し貯まると、ひょいと海外へも出かける。また別の人は大工仕事が得意で、途上国で学校を建ててきたり、ヨーロッパで日本文化を教えるイベントに参加したりと、頼まれてどこへでも行く。定職には就いていない。蓄えはないのに、基本遊んで暮らしている。おおよそ銀行屋さんが描く経済モデルには全く乗らない人たちです。寅さんみみたいな屋（てきや）ではない、ジャパニーズ・ボヘミアーンです。夏場は「忙しくて仕事をする暇がない」そうです。今は旅に出ているとか。

彼らが持っているものは健康な身体と、ちょっとした特技、度胸と遊び心、助けあう仲間と放浪癖といったところでしょうか。こんな風に暮らせるんだと大変参考になりました。来る経済破綻に向け、周辺の農家と仲良くして、地域で物々交換と助け合いで生きていける準備を続けようと思うこの頃です。戦争と、これ以上の原発事故だけではないように祈りつつ…。

引越し備忘録



旭川市医師会
あけ美肌クリニック

田村明美

今年、48歳の年女ということで、原稿依頼を受けました。私は、茨城県に生まれ、1996年に札幌医大を卒業、形成外科に入局、道内の関連施設を転々とし、2008年、西武旭川店で「あけ美肌クリニック」という形成外科、皮膚科、美容皮膚科のクリニックを開業いたしました。当初はリーマンショックの真っ只中。世間は厳しいなと思いつつ、あまりあせらず、こつこつと診療を続けておりました。

そこそこ軌道に乗っていた2016年の3月、何の前ぶれもなく、西武旭川店の閉店のニュースをバイト先の医局の新聞で目にし、頭が真っ白になりました。心の葛藤はありましたが、決まったことはどうしようもないです。そこから先は移転に向けて、粛々と作業を進めていきました。

まず、本社側との金銭を含めた移転の条件交渉は、契約書だけは知人の弁護士さんにチェックしてもらい、全部自分でしました。

移転まで、半年を切っています。移転先の決定、内装業者さんの決定、やることは山ほどあります。時間はないし、お金もかけたくない。安くて、小回りの効く業者さんに巡り会えて本当にラッキーでした。工事ぎりぎりでした。

前はコンサルタントに任せっきりだった保険医療機関指定の届出と診療所の開設届も、ネットで書き方は分かりますし、不明なことは厚生局や保健所の担当者が親切丁寧に教えてくれるということがよく分かりました。

通常業務を行いながらスタッフと荷造りして、9月30日の西武の閉店までぎりぎり診療。そこから1週間、小さいクリニックとはいえ、病院の引越です。レーザー、无影灯などの医療機器、電子カルテの引越しがやはり一番大変でした。閉店後の西武の搬入口は大混雑。時間の割り当てがテナントごとに決められてしまっているため、各業者さんのタイムテーブルを作成し、滞りなく作業が終わるように調整しました。10月7日、最低限の休診で無事移転オープンすることができました。

今回の件で学んだこと。必死でやれば、何とかなる。熱意があれば、手を貸してくれる人はいます。そして経験は人を成長させるということです。世間知らずな医者典型でしたが、世の中の仕事というものが少し分かりました。

でも、もう2度とやりたくないです。